「なんでやねん！」を怖がった熊本女性

私のなにわの語りべ作品に「西南戦争」がある。明治十年鹿児島において、西郷隆盛を盟主として不平士族が決起した、わが国最後の内戦であり、明治初期に相次いだ士族の反乱の中でも最大規模だった西南戦争。

この語りべ作品は随分以前につくったものなのだが、かねがね一度鹿児島や熊本を訪ね、西南戦争の跡地を巡ってみたいと考えていた。九州新幹線が全線開通したのを機に、昨年秋、三泊四日で鹿児島と熊本を訪れた。

鹿児島はもとより西郷隆盛の町。シティビューと名づけられた市内周遊バスがあって、一日乗車券を六〇〇円で買うと何台ものシティビューが乗り放題。

台座を含めると高さ八mの軍服姿の西郷銅像の前で写真を撮った後で、次のバスで西郷洞窟などへ行ったりもできる。このほか鹿児島市営の観光バスもあって、城山や私学校跡地（塀には銃弾の跡も）、南州墓地などをガイドさんが付いて説明してくれる。

熊本で、西南戦争の最大の激戦地となったのが田原坂。田原坂のこの道だけが唯一大砲を曳いて登ることができる坂道だった。田原坂を越えなければ政府軍は熊本城に籠城する熊本鎮台の救出に向かうことができなかった。

田原坂の激戦に破れた薩摩軍の敗走がここから始まる。田原坂では一の坂、二の坂、三の坂や田原坂資料館、弾痕の家、官軍六、九二三名、薩軍七、一八六名、殉難者二九名の慰霊塔、吉次峠跡などいろいろとタクシーで回った。

熊本でも観光バスがあって熊本城へも行ったが、天守閣には西南戦争の記念品も展示されていて、中には薩摩軍から籠城中の鎮台兵に向けて射込んだ投降勧告の矢文や逆に政府軍が薩摩軍に撒いた投降勧告には「政府軍に降参するものは殺さず」とあった。

私には感慨深い旅だったが、実はこの旅で思いがけない体験をした。

折角来たのだから阿蘇にまで足をのばそうと思って、熊本の案内所で特急券を買っていたときのこと。

「この日のこの時間はこの列車は運行していません」と案内所の女性が言うので、思わず私が「なんでやねん！」と言うと、一瞬、彼女がぎょっとした表情を浮かべて、怖そうに後ずさりするような動きを見せた。

これは私が何の気なしに発した「大阪弁」に過剰に反応したもの。

大阪弁を使う大阪人は下品で柄が悪く

けられた防災意識、地域ぐるみの避難行動を産みつけたと考えることができる。

すなわち、地震や津波、風水害を生き抜いてきた日本列島に生き残った人間に、不安という機能が強く備わった、学習したと考えることができる。

不安に関係する遺伝子

一方、日本人は欧米人とは違って、不安を感じる遺伝子をもっているとする仮説がここ十数年の間に確立されつつある。

そういえば一般に日本人は欧米人より怖がりであり、不安が強いと目されている。ビジネスの場面でも、日本人は欧米人の前では自己主張せず、薄笑いを浮かべて小声で、遠慮がちに話す。こうした姿は、欧米人にはびびっているように見える。外見上のこうした日本人への印象が、遺伝子の違いと関係が深いというのである。

ここで登場する遺伝子とは、セロトニンという脳内の神経伝達物質をコントロールするセロトニントランスポータ（5-HTT）のことである。セロトニンが不足すると、人は不安になり、うつ感情が増すことが知られている。うつ病の薬SSRIは、このセロトニン量をコントロールしてうつ症状を軽減させる。

セロトニントランスポータとは、名が示すようにセロトニンの運び屋であり、17番染色体上にその遺伝情報があり、神経終末から放出されたセロトニンを再び取り込む役割を果たしている。

5-HTTのプロモーター領域に5-HTTの発現量に関する情報がある。プロモーター領域の長さは人によって異なり、長い型（l型）の遺伝子をもつ人は、短い型（s型）の遺伝子をもつ人より5-HTTの発現が多く、セロトニンの再取り込みが活発である。

父母から一組ずつの遺伝子セットを受け継ぐので、組み合わせは両親ともl型のl／l型、両親ともs型のs／s型、父母間で異なるl／s型の3通りになる。

私が制作にたずさわったフジテレビ『たけしの日本人白書』（2月25日放送）で行った調査によると、s型遺伝子をもつ人（s／s型、l／s型）の割合は、日本人90％、欧米系白人では61％、アフリカ系黒人では43％であった。一方、不安を誘発する実験で、心拍数とまばたき数が増加した度合いで判定した不安を感じた人の割合は、日本人90％、白色欧米人23％、アフリカ系黒人37％であった。

いずれのデータも、日本人の90％が不安を感じやすく、ダントツに高い割合であることを示した。遺伝子の型によって、不安が強く感じられるのはいったいなぜだろうか？

人類発祥の地アフリカ大陸から、天変地変の地球上を大移動して、ようやく日本に辿りついて定住した日本人は、恐怖事象に早期に気づき、予見し、対処することによって生き抜くために「不安」を強くもつ形質を遺伝させてきたと考えることができる。そしてそれは、地震列島に生きるための重要な術にもなったのであろう。

やまだ・ふみお　大阪人間科学大学人間科学部教授・健康心理学科長、大学院人間科学研究科長・健康支援センター長

日本人の不安～遺伝によるか経験によるか～

山田 冨美雄

東日本大震災のあと、多くの日本人は落ち着かない日々を送っている。不安な日々が積み重なり、まる1年が過ぎた。テレビで震災の特集番組が組まれ、また再び不安が高まった。今回は震災ストレスの主症状である「不安」について考えてみよう。

震災と不安

地震直後には誰もが、余震不安を抱いた。いつまた余震が起こるかと不安で眠れない。少し揺れただけで飛び起きる。不意に地震を思い出すなどの症状は被災地ならずとも続いた。これは、生き延びるための適応反応である。

今回の地震では津波が災害を大きくした。テレビで見た津波の映像は衝撃的だった。被災地ではない大阪でも、テレビで見た光景が原因となって、いわれもない不安をかもしだした。台風などの風水害もあって、いつ何時、家が水や土砂に流されるかと思うと、落ち着いて眠れない。

地震や津波のせいで原発事故が発生すると、風向きによっては放射能で土地が汚染され、住めなくなるかもしれない。湖が汚染されれば、生活用水にも困る。農作物や魚介類が汚染されれば職を失う。子どもの将来、とくに健康が心配だ。

どうしてこうも、不安を感じるのだろう。津波被害が出るほどの大きな余震も起こっていないのに、なぜみんな不安なのだろうか。日本人固有の特性なのだろうか?

地震列島固有か?

こうした不安な気持ちは、地震国日本ならではのものであろうか。

大地震などの自然災害が起こると、不安は強まり、余震を警戒し、防災を心がけるようになる。災害への不安は防災行動の動機となり、災害に強い建築物の設計や街づくりに活かされる。

その結果、地震に強い高層建築が都会に乱立し、山を切り開いた高台に住宅地が造成される。避難訓練が習慣化し、言い伝えを生み、伝統行事の祭りの原型となる。

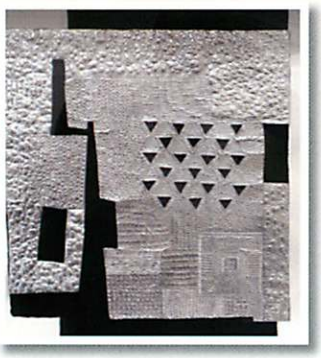
長い歴史の中で、地震や津波の被害で多くの犠牲を出した経験は、日本人の精神構造の中に、災害への不安、不安によって動機づ

京都精華大学版画科卒
2002年～神戸、大阪を中心に活動
2009年　個展●神戸/アトリエ2001　個展●神戸/DELLA PACHE　3人展●神戸/アートスペースかおる
2010年　thing matter time●大阪/信濃橋画廊　10人の表現者の模索●大阪/信濃橋画廊
田んぼでアート●E.P.A.S IN FUKUI　個展●大阪/信濃橋画廊
2011年　インパクトアート展●京都/京都市美術館　個展●神戸/ストリートギャラリー
2012年　4月　東京・京橋/ギャラリーK
9月15～17日、22～24日　神戸/アートスペースかおる
http://sabokoono.blog68.fc2.com/

モチーフの多くは、数々のアジアひとり旅で観た少数民族の織物や刺繍、そしてネパールで少しだけ修行をさせていただいたマンダラ制作、私の命と共に流れる無意識の形が作品のベースになっています。私は日本人らしくないアジアや南米の人種に間違えられる風貌をしているようなので、もしかしたら、DNAがワタシに、多民族の仕事をミックスした制作をさせているのかなぁ?なんて思ったりもしています。

島国のこの国には、多くの民族が海の向こうからやってきて、さまざまな交流をして色んな血が混じっているはずです。私は多様な文化や宗教が重なって存在しているところに平和の欠片のような何かしら、純度の高い希望的な存在を感じます。日本では宗教戦争はありませんが、それはこの国のいい側面だと私は思っています。作品も同様に私の中の無意識の感覚ミキサーにプロデュースしてもらい、この手の中から私の心のマンダラ、国境のないマンダラの絵を描いていけたら幸せです。

現在、完成している300個のサボバッチやミラー。実はひとつひとつマンダラの一片なんですが、元気になって旅にも行けるようになったら、お世話になった未だ見ぬ異国の友人達にサプライズプレゼントするつもりです。また、小さなバッチで出合ったアルミの素材にも沢山の可能性を感じるので、これからも美術活動の旅を、ゆっくりとした呼吸に合わせ、コツコツと新境地を目指したいと思います。



私たちは未知なる存在。ギャラリーは一期一会で出会いを大切にできるような、きっかけであってもいいと思うんです。作品の中で私にも全然見えなかった形を見つけてください。